



運慶学園入試問題 解答集

【問題1】 運慶が活躍した時代はいつでしょうか？

正解 (平安〜鎌倉時代)

【解説】 運慶の確かな生没年は知られていませんが、長男の湛慶(たんけい)が承安3年(1173)の誕生であること、また後世の系図で貞応2年(1223)に亡くなったことが推測されます。70代ごろまで活躍したことになりますが、当時としては長命ですね。

【問題2】 運慶の師匠は誰でしょうか？

正解 (康慶(こうけい))

【解説】 運慶最初期の作である奈良・円成寺の国宝「大日如来坐像」の台座にある銘文に「大仏師康慶／実弟子運慶」とあり、康慶の息子であり弟子であったことがわかります。なお、源慶は康慶時代からの古参の弟子、運助と運賀はともに運慶の息子とされ、いずれも奈良・興福寺の北円堂の造仏で運慶のもと制作をおこないました。

【問題3】 運慶と並んで有名な仏師・快慶。

この2人の関係は？

正解 (兄弟弟子)

【解説】 快慶の出自についてはよくわかっていませんが、運慶と同じく康慶の弟子であったことが推測されています。ただし、後年には行快や長快など、快慶にも弟子がいたことが知られるため、運慶の工房とは独立して制作をおこなっていたようです。もちろん、大事業では一門の仏師が協力して仕事にあたりました。

【問題4】 運慶には子どもがいたことがわかりますが、何人いたでしょうか？

正解 (5人以上)

【解説】 運慶には、長男の湛慶について、康運、康弁、康勝、運賀、運動と少なくとも仏師として活躍した6人の息子にぐわえ、如意という娘がいたことも知られます。あるいは、記録に残っていないだけで、ほかに子どもがいたかもしれません。

【問題5】 運慶の属した仏師集団は、いま何と呼ばれているでしょうか？

正解 (慶派)

【解説】 運慶の父である康慶の世代までは、奈良で活躍したことから、現在「奈良仏師」と称していますが、康慶(こうけい)から運慶、湛慶(たんけい)へと「慶」の字を継ぐ仏師がつくことから、「慶派」と呼んでいます。ほかに、「院」の字を代々継いでいる「院派」や、「円」の字を継ぐことから「円派」と呼ばれる仏師集団が知られ、あわせて「三派仏師」とも呼ばれます。

【問題6】 運慶たちが活躍するきっかけとなった出来事は何でしょうか？

正解 (源平の合戦)

【解説】 治承4年(1180)、源平の争いに関わり、興福寺や東大寺といった奈良の寺院が焼けてしまう事件がおこりました。ただちにその復興が企図されますが、そこで頭角をあらわしたのが、奈良を拠点に活動していた「奈良仏師」(のちの「慶派」)です。文治2年(1186)には興福寺西金堂の造仏を運慶が担当していたこともわかり、康慶一門のなかでも運慶は早くから期待されていたようです。

【問題7】 静岡・願成就院の国宝「毘沙門天立像」は、像内に納入されていた銘札から運慶作と判明しますが、それはどのような形をしているのでしょうか？

正解 (五輪塔(ごりんとう))

【解説】 五輪塔は、下方から地・水・火・風・空の五大要素をあらわすシンボルですが、悟りを開く心を月にたとえ、「心月輪(しんがちりん)」と呼ばれています。中世以降、仏の魂として仏像に納入されるようになりますが、とくに運慶は重視していたとみられ、その形状の変化が作品の制作年を推定する手がかりにもなっています。

【問題8】 奈良・興福寺の重要文化財「仏頭」は、近年、運慶作と判明して話題になりましたが、なぜ運慶作とわかったのでしょうか？

正解 (僧侶の日記)

【解説】 像内の銘記から、興福寺西金堂の本尊である釈迦如来像の頭部とわかっていましたが、作者については知られていませんでした。平成19年(2007)、興福寺の僧侶信円の日記から、運慶が仏像を搬入し、報酬を受け取っていることが明らかとなり、運慶作と認められました。同じころの願成就院などの仏像とは表現がことなりますが、火災による再興像であったため、もとの像に影響されているのかもしれない。

【問題9】 愛知・瀧山寺の重要文化財「聖観音菩薩立像」には、ある人物の歯と髪が納入されていると伝えられています。その人物とは誰でしょうか？

正解 (源頼朝)

【解説】 瀧山寺(たきざんじ)に伝わる縁起に、建久10年(1199)に亡くなった源頼朝を供養するため、従兄弟の僧侶寛伝がつくったとされており、像内に頼朝の歯と髪を納めたといえます。X線透過撮影によっても、それらしい物品が確認されており、伝承が信頼されるにいたりました。後世に補彩がなされているものの、堅実な表現は運慶らしさを伝えており、寺外初公開の注目作品です。でお見逃しなく。